

その出発と

せんじ・せんせ

メナード美術館はこの10月28日に、開館25周年の記念日を迎える。日本メナード化粧品株式会社の創業者野々川大介・美寿子夫妻が中心となって、永年に亘る蒐集美術品約千点（現在は千四百余点）を基盤に、おふたりの生れ故郷小牧の地に設立された。その時大変辛いことがあった。誰よりも開館を待ち望んでいた美寿子夫人が、病を得て直前の7月14日に亡くなつてしまわれたのだ。嘆き悲しまれた大介現会長、純一現社長は、この地方では聞こえた詩人・柏木義雄さんをお宅に招いて想い出話を充分に聞いて貰い、一つの詩「美寿子存問」が誕生した。存問とは安否を問うこと、即ち黄泉に行かれた奥様に、お元気ですかと呼びかける内容。この詩を彫り込んで存問の碑として美術館の入口に据えられ館の皆様をお迎えしている。

る所蔵企画展と、1～2年に一回の特別展を開催してきたが、これらも150回に及ぶ。私が館長として在任中、数あるテーマ展で一番思い出すのは、「金と銀の煌き」である。金箔・銀箔などを画家がどうこなして作品を生み出したかを観て貰う展観だが、その題名から連想して、当時名古屋発信で全国的に有名となっていた、百歳を超す双子の女性「きんさん・ぎんさん」に来館を願つたところ、案に相違して二つ返事で行きましょうと。一人の到着前に美術館の前は黒山の人だかり。車椅子に乗つてもらつて館内を一巡する。平山郁夫の《紫宮觀望》の前では「高い山から谷底見れば……」と突然唄い出すきんさん。青邨の《金鳶》の前で神武天皇ですよ、と云うと、「あっ、拝まにやいかん」と手を合わせるぎんさん。廻りの人々は、この二人のユーモアに笑いの渦であった。その後、館長室で寬いで貰つたお二人にサインブックの署名をお願いした。「きん」と「ぎん」力強い筆のあとが美術館に残つている。美術館もお二人の長命にあやかりたいものである。

テーマについては、美術館の学芸員が考え抜いて、コレクションの中から、季節感、作品数、色などから見方を異にし、切口を変え

てタイトルを決め、展覧会を構成している。これ迄にも「黒い造形」「音、絵から何が聞えますか」「絵画と光」「顔」などなど。何れもその当時好評を戴いたものである。お客様からは、同じ作品でも違った印象や鑑賞があつて面白い、と感想を頂いている。

メナード美術館 顧問



開館当時のメナード美術館外観
入口両側にそびえ立つ大樹の樺も、
この頃は頼りなげであった。

メナード美術館開館25周年記念展
舟越桂2012 永遠をみるひと
11月25日まで開催中